第２０２号

芥川だより

発行日＊２０２３年１１月１日　e-mail: ab_879686240@yahoo.co.jp
最新号から創刊号まで閲覧できます。 http:// akutagawadayori.sakura.ne.jp/

編集　　川口　伸
発行 人　　下村嘉明
〒661-0951
尼崎市田能5-3-10-601
☎090-8796－8624

＊＊＊＊＊＊＊＊ 一部２００円です ＊＊＊＊＊＊＊＊

憂鬱な世界情勢

毎日テレビで流れるウクライナ戦争と地獄のようなガザのがれきの山、日本じゃなかったと安堵する気持ちとこれから起きるであろう戦争の長期化と拡大を想像すると浮かれそうになる年末は暗黒の世紀への入り口のようにさえ感じる

これまで多くの戦争で命を失い傷つき無数の建物や文化を破壊しつくしてきた人類は、まだまだ足りないとでもいうように戦争を一刻もやめようとしない。人間の業とは誠に恐ろしく際限のないものだ。地球上の資源を喰い尽くし、人間の命までも食い尽くす化け物は、人類が生き延びてきた長い年月の中で作り上げてきた DNA なのか？飢餓状態を生き延びるためには、常に人を殺し有限の資源を食つなぐ宿命を DNA に織り込みつ続けて今の私たちがあるのか。

世界平和や平等などの言葉は、恐ろしい人間の欲望を隠すための一時的な詭弁でしかなかったのか。美しい優しい言葉や行いの裏側に潜む人間の心は、なんとも恐ろしい得体のしれない化け物なのだろう。

今回の世界状況をみていると三次世界大戦どころか人類最終戦争とでもいえそうな、すべての過去が入り交じりごちゃ混ぜになり理解不能になっていくという、これまで我々が経験したことも無ければ聞いたことも無いような流れが始まってしまった。

宗教やイデオロギー、経済格差などが、まさにブラックホールに吸い込まれて爆発していくような想像をしてしまう。国連や各種の国際条約などがその効力を失い、遠い昔の亡霊のような過去の歴史を振りかざして戦争を正当化し拡大する悪魔の亡霊たちはますます勢いを増している。我々をその悲劇から救う手立ては自立した自我と心の奥に潜む善なる良心・直感ともいえる心を今一度見直し、マスコミや権力者の言葉に惑わされず、自分を信じるしか生き延びる方法はない。

死をめぐるあれやこれ（１０８）　石川　吾郎

増税メガネ

このあだ名が国会にまで登場してすっかり定着した感がある岸田首相が、よほどこのあだ名を嫌ったのか、早速所得税減税を打ち出した。しかしその規模はとてつもなくショボくて、一桁間違っているのかと思わせるようなものだ。食料など生活必需品の値上がりがとてつもないこのごろ、まっとうな政策は消費税の廃止を置いてないだろう。しかし決してそれは実現されない。というのも財務省が許さないからだという。◆なぜか。財務省の高級官僚は増税を実現すれば昇進が約束され、減税を許せば昇進の夢は消えるのだという。どんなに反国民的であろうと増税を進める仕組みになっているのだという。これはどうも単なる噂ではないらしい。◆というのもノーパンシャブシャブスキャンダルで旧大蔵省が解体されて、平成十三年に財務省が設立されるにあたって、財務省設置法第三条で「健全な財政の確保…を図ることを任務とする」と規定されてしまっているからだ。「健全な財政の確保」とは、つまり政府が税収以上の支出をせず、国債を発行しないこと、つまりは緊縮政策を行うことを意味している。増税をして税収を上げることは財務省とその役人の一番の任務だということになる。国民がどれほど生活にあえいでいてもこの日本最強の省庁はそれを見ず、政府にも消費税減税・廃止といった本格的な減税は許すことは絶対しない。この方針に抵抗する内閣はス

キャンダルで倒される。国税庁が財務省に属している以上、それは可能でたやすいことなのだ。◆わが国の三十年に及ぶ経済的後退の状態のかなりの部分は、この事実が大きくかかわっていると言える。マスコミも財務省を敵にまわすような報道は一切しない、タブーなのだ。◆国の仕組みで、財務省がこのような強大な権力をもってしまう状況は、変えていかなければならない。さもなければ我々国民はどんなに生活に困窮しても増税され続けることになる。私たちが生き残るためには、このような構造を改めるまっとうな政治勢力を育てていくことがどうしても必要だ…。これができる野党勢力とは？

芥川だより二〇二号　目次　ページ

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム108	石川吾郎	1
素老人☆よもだ帳　116	坂本一光	2
哲学爺いの時事放談66	祖蔵哲	3
大峰奥駆道72	下村嘉明	4
新型コロナウイルス愚考その38	明石幸次郎	5
オクラの山たより86	因了生	6
隠された歴史61	満田正賢	8
同じ青春を過ごしたセツラーの想い―セツル活動に魅せられて	屋形町北セツルトッポ	12
道を行く　四五	成瀬和之	11
俳句	影山武司	14
編集後記	SK生	14
ふみの道草65	山椒魚	15

素老人☆よもだ帳（116）

坂本　一光

◆四十六億年後の星

地球が誕生して四十六億年、今年もまた春、夏、秋がめぐって来た。しかし、例えば春、山笑う国にも世界にも笑えぬことがあり笑えない人がいる。永遠に繰り返すのだろうか、自然も社会も移ろい過ぎてゆく。

愚かなる輩は、泣き笑い怒るその点にも満たない心の一瞬の動きを、どうすれば五七五に写し取ることができるか。ありふれた言葉を紡ぐ先人の句を「いいなあ」と読むことはできても、そんな句を自分で詠める訳ではない。四季の移ろいを目にしながら、春にも、夏にも、秋にもそして冬にも、道は遥かに遠いと繰り返し思う。

昨年二月末、ロシアのウクライナ侵略が始まった早春から今年の春までの一年を五七五で並べてみた。

戦雲の彼方に昇る春北斗
花は咲くいくさ平和も知らず咲く
戦する二つの国に同じ花
頬なでる風に桃の芽笑い出す
幸せが前線となる桜の国
復興へ桜いくたび咲いて散る
よう来たと廃校の庭花吹雪
万緑の中や初孫呱呱の声
八月のあの青空にある答え
戦死者も呼んで昭和の門火焚く
桃熟れて命は水の美しさ
水澄むや川は昔のまま流れ
ヘイタイもコメもデンキも出して過疎
ウイルスが暮らしの音を消して秋
名月の下に戦のヒト科ヒト
かなしみを憶良に聞いている夜長
かなしみを燃やせば心あたたまる
水の輪のかたち残して初氷
営みの記憶を消して雪が降る
この道のように曲がって春が来る

そして今、ウクライナの戦争と背後でどうつながっているかいないか分からないが、ウクライナの戦火がパレスチナに飛び火、大火となっている。無力を知ってはいても言わずにおれないことがあり、そう思えば言うほかない。

蟷螂の斧だと知っていて上げる
戦争も平和も神が決めるのか
戦争も平和も人が決めるもの
ゲルニカが今日も生まれる黒い星

それぞれに言えない事情もあり、言いたいこともあるのだろうが、

ご破算で願いましては闇の星
黒い星、闇の星はパチンと、一度ご破算にしてもらいたいもの。そんな時にこの国はと言えば、
戦する国の始末にまた始末
をつけようとしている。しかし間違いも無くこの国は、戦後今まで、
アレがあるだから殺さぬ殺されぬ
国であった。戦する国につけた七十八年前

の始末に今また始末をつけると、元の木阿弥、戦する国に戻るだろう。それを良しとする飛んでもない「よもだもん」の政治家を国民は本当に選んだのだろうか。

東日本大震災の津波が押しつぶした町と変わらぬ光景をテレビに映ったウクライナの町に、ガザの町に見るとき、平和とは何だろうと思ってしまう。

お日さまに布団を干している平和

たったそれだけのことが出来ない不思議の星に、四十六億年経っても生きていることを今さらながらに思い知っている。

（かたちは心であり、心はかたちになる■大分の素老人）

「哲学爺い」の時事放談（６６）

祖蔵　哲

『AI の倫理』

今月の時事ニュースは単なるローカルなニュースであるが、阪神タイガースの３８年ぶりの優勝から始めなければならない。関西同士の対決となった今年のプロ野球日本シリーズは「予想」に反してタイガースが勝利した。ここ関西は何といっても野球は阪神である。すべてのことについて首都東京との対抗意識から生まれるものであろう。しかし、その対抗戦略は必ずしも成功しているとは言い難い。近年開催された東京オリンピックは汚職問題で負の遺産を残した。にも関わらず大阪は強引に万博を誘致しその建設費は増加するばかりである。前回の大阪万博は１９７０年、そして前回の阪神優勝はそれからさらに１５年後の１９８５年の遥か昔のことである。夢よ、もう一度！　かもしれないが、当時の日本は中曽根内閣の新自由主義、公社民営化政策の開始、そして日航機墜落事故。世界ではイラン・イラク戦争の最中である。現在のウクライナ戦争、そしてイスラエルの状況、社会の混乱は何も変わっていない。歴史は反省のない単なる繰り返しなのであろうか。

さて、テーマは早速「人工知能AI」に入る。先月号では AI が仕事を奪うということで世界中でストライキが連続していることを話した。そして、最近はニュースでも AI による合成フェイク写真や動画によって事実が曲げられ「新たな現実」が作られている。なにが事実か現実かを判断する道具としてでさえ AI を用いざるを得ないという悪循環におちいっている。そして、従来は AI を使うのが人間であるから、その責任は人間が負うのが当然という理屈が歯止めとして機能していたが、近年は AI が自律性をもち始めたためそれも問えなくなってきている。

（1）AI のトロッコ問題

状況判断を自律的に行うことができるシステムを機械に搭載させた場合、いくつかの問題が生じる。自動車やロボットなどは、特にその可能性が高い。というのも、AI を搭載したハードウェアが現実世界でも自律的に行動を起こすと、事故を起こすなどのトラブルを発生させる可能性が高まると同時に、そのトラブルの責任の所在を明確にできなくなるからである。この「責任の所在」は、人間でも物議をかもすことが多い難しい問題でもあるため、人間ではない AI が関係してくるとさらに複雑になる。この種の「責任の所在」を問う事例としては、トロッコ問題というものが有名だ。トロッコ問題とは、イギリスの哲学者であるフィリッパ・フット氏が提唱したもので、簡単に言えば「ある人を助けるために他の人を犠牲にするのは許されるか」という問いである。これを現代の AI 自動運転に書き換えてみよう。

『ある市内を走る巡回コースを走っていた自動運転バスが交差点にさし掛かった時、大型トレーラーが信号を無視して交差点に突入しようとしている。これを避けるためハンドルを右に切ると衝突は避けられるが登校中の小学生の通学列に突入し１２名の児童の死傷は避けられない。このままトレーラーと衝突すれば、乗客５名は確実に衝突し自らも大破する。乗客の四名は高齢者であり一人は介護者である。この時、自動運転を行う人工知能はどのような判断をすべきであろうか。』

（2）社会的規範「法」「道徳」「倫理」

「判断」は何かの「基準」においてなされる、これを「規範」という。規範は，理由の如何は問わずまず従うべき行動様式である。しかし、その基準が「欲望」や「私利」に基づくと共同体や社会の秩序は混乱する。そこで個人の主観的判断でなく社会的な客観的判断が求められる。これが「社会規範」である。この社会規範の中には，道徳，法，倫理，慣習等がある。「慣習」は共同体や国家、宗教などのよって様々に規定され細分かされており、客観的な判断とはなりにくい。「社会的規範」のうち客観的で一番強制力を持つものが「法」である。「法」は国家権力において「警察」「裁判」等、有形の効力を持ち、実行力がある。他方、道徳は人の内心に働きけるものであり、望まれる行動規範に従わなくてもなんら罰則を受けることはない。良心の呵責に苛まれるとしても、本人が自発的に行動しない限り変化は起きないのである。同様に倫理も同じである。では道徳と倫理はどのように違うのか。

（3）倫理とは

実は倫理と道徳については，内心に訴えかける規範という点では区別が難しい。道徳は，個人や家族といった小集団を対象とし極めて 個人的な内心に大きく依存するに対し、倫理は汎用性を持ち得る。つまり、道徳は地域性、宗教、慣習などの個人的な要素を多く反映させているが、倫理は特定の社会集団に共通の規範として 適用し得る。しかし、これらはほぼ同じ概念として考えても良い。つまり、「倫理（道徳）的判断」とは「ある行為やある人の性格の価値について下される判断」と定義される。「うそをついてはならない」とか「約束は守るべきだ」とか、私たちが子どものころから教え込まれてきたさまざまな規範はその例である。

これに関して、倫理学というものがある。これは「なぜ○○すべきか」「なぜ△△はよいのか」という倫理そのものの根拠を問う学である。その立場から言うと「倫理」というものは互いに人間個人が共存可能な条件であるということになる。

（4）AI の倫理で問われているもの

AI 倫理において、主に議論されている課題には次の四つがある。まず①責任の所在、②バイアス・偏見、③プライバシー・個人情報、そして④AI の権利である。

AI がなにか問題を起こしたとき、その責任の所在について現状では明確化されていない。たとえば、先ほどの自動運転システムを搭載した自動車が事故を起こした際の責任は運転者にあるのか、はたまた AI を開発した技術者なのか、あるいは車のメーカーなのかといった部分は曖昧なままになっている。しかし、この問題はこれから検討されるべき課題である。なぜなら近年まで自動システムの動作はプログラマー開発者の技術的範疇であった。しかし最近の生成 AI などは AI 自身が独自に新しい行動を判断して動きを命令するのである。人間と AI は対等の関係にある。

また、その AI が導き出した分析や結果には、学習データの偏りによるバイアスや偏見が影響する可能性が否定できない。近年問題になったのは人事採用での AI 選定。人種や個人履歴から勝手に採用基準を定めてランク付けしていた事例がある。

さらに AI の学習データには、個人情報が含まれている。ウェブサイトを定期的に巡回し、情報を取得・保存する「クローリング」や、AI を用いた監視カメラやセンサーは個人情報が蓄積されている。アプリから取得される位置情報や SNS のつながり、趣味などの個人情報によって、おすすめの商品などを提示するアルゴリズムについても同様だ。個人情報の取得を承諾していないのにもかかわらず、個人情報を収集したり、カメラやセンサーから取得されたデータの使途が不明瞭であったりすれば、多くの人はプライバシーや個人情報に不安を覚える。

一方で、AI に関する権利についても議論が進められている。少し前まではこの「権利」という概念は AI が使用する他人の著作権問題のことを指していた。しかし、近年この問題は回避されている。なぜなら AI 自身が他者の作品をそのままコピーするという必要はなくなり、その作品を真似るという自律的技術を身につけたからだ。つまり、人間がやっていることと変わりがないのである。ある芸術家はモナリザの絵からインスピレーションを得て作品を完成させる。これはもう単なるコピーではなく、その芸術家の独自の作品になる。これと同じことが AI にも生じているのだ。AI の権利は AI 自身がもっているのか、それともそれを使用する人間がもっているのか。都合のいい場合は人間、都合の悪い場合は AI の責任にすることは許されない。AI もいよいよ「人権」を議論する時代に入っているのだ。そのためには「AI の倫理」が必要になる。これは「AI」と「人間」の共存を可能にするための条件「倫理学」の問題である。これまで倫理学は主に人間を対象にしてきた、しかしこれからは新しい「倫理学」が求められるのだ。同じことが哲学についても言える。

大峯奥駈道（72）

下村　嘉明

体験型人間学　22

高級住宅地である神戸・芦屋の山手で仕事を一ヶ月した。評判にかなわず裕福そうな人たちが暮らしていた。しかし、高齢化が進みいまひとつ活気がないようにも思えた。

まあ、貧乏人のひがみは、これでおしまいにし、芦屋をあまりご存じでない人の為に、どれぐらい裕福な人たちかを少しだけ書いてみたい。

まず、一番目につくのは車だ。外車の大きな高価な車がやけに多い。最高級なロールスロイス、これがあの有名な車とは知らずに狭い所で交通誘導をしていたら、毎日、数回は同じ車が通る。最初に自然と目についたのは、運転をされている女性のエレガントさであった。着ているセーターも薄グリーンの品が感じられたが、運転している女性の美しさと上品な身のこなしである。私のすぐ横を通過される時は必ず、私の顔を見て笑顔で挨拶される。最初は外人かなと思ったが、間違いなく日本人だと思う。芦屋の幹線道路の一本北の道で信号がないから半端なく車が通る。工事車両を止めてるので、毎日、一日道路端に立って交通誘導をする。毎日、ガラス窓越しに多くの人を見る。しかも、大半は女性である。高級外

車の全てが走っていると言ってもいいぐらい名前もよく知らない大きな車が毎日走っている。

ある日、ロイスが普段と違う道から出てきた、直角に右折しなければならない。私は車の前に行き誘導する。運転手はいつもの女性だ。私は丁寧に彼女とやり取りをして安全に車を誘導した。通りすがりに彼女は丁寧なあいさつと笑顔を私にくれた。数多くの外車ときれいな女性ドライバーを見てきたが、ロイスの彼女に優る印象は受けなかった。

もう直ぐ仕事も完成するという時期に、警備会社から研修社員を連れて行くから、仕事ぶりを見せてやって話を聞かせてくれと連絡があった。初めて聞く現場での研修とは恐れ入った。これまで聞いた事がない。当日の朝、休憩室に新人さんは社員と一緒に来た。朝すべきKY（危険予知）の書き方を簡単に教えて、朝礼に出る。幸い、この現場での監督や足場組の頭とのコミュニケーションがうまく出来ており雰囲気のよい職場だったから、新人に誘導の仕方や基本的な警備員の心がけを私流に話す。

新人が私の姿を見てかっこいいと褒めるので、調子に乗って新人に質問した。すると意外な返事が返ってきた。年齢は72歳、これまで設計事務所を4人ばかり使ってやっていた。本人は、1級建築設計士の資格を学校卒業時に取得し、卒業と同時に大阪ミナミのキャバレーの設計を頼まれ図面を書いたのが初めで、以後キャバレーばかりを手掛けてきた。中には大きな2000坪のキャバレーもあったと言う。

警備会社へは、いろいろな経歴の人がいると聞いて関心を持ったという。私と同じように酒豪だという。若い時は、酒池肉林の世界におぼれていたのかもしれない。大坂で生まれ、芦屋で育ち、今も大きな家で独り暮らしているらしい。確かに現場付近の事は良く知っていた。これまで、新人の世話をたくさんしてきたが、同年齢という事もあり、昔からのなじみのような感じがした。

新型コロナウイルス禍愚考（その38）

明石　幸次郎

新型コロナウイルス感染愚考（その38）

新型コロナウイルス感染禍のお陰で？日頃は当たり前と思っていたことが当たり前でない生活を強いられることを経験しました。この愚考もそろそろ新型コロナウイルス感染の終息と共に終えたいと思いますが、もう少し感染が続くような状況でありますので、「幸福、幸せとは」というテーマで愚考の続きを今回もしています。

幸せの定義とは何かと考えると

＊「幸福」心が満ち足りていること。又、そのさま。しあわせ。

＊「幸せ」幸福。幸運。さいわい。又、運が向くこと。

＊「happy」幸福な、幸せそうな、楽しい、友好的な、うれしい、喜んで――――する。

＊「嬉しい」晴々と喜ばしい。快く楽しい。

＊「楽しい」満足で愉快な気分である。快い。豊かである。富んでいる。

夫々「コウフク」な状態、気分、気持ちを表していますが「幸福」は人生が幸福である、というようにロングスパンの心の状態であるのに対して「嬉しい」は、気分や感情を表します。「楽しい」も楽しい気分、幸せな気分と言うように気分はタイムスパンの短い心の状態を示します。

古代ギリシャ・ローマでは、幸福に関しては、二つの考え方があったと言います。幸福主義と快楽主義です。前者は人生にわたって長いスパンで幸福を目指すべきだという考えであり、後者は刹那的な快楽の繰り返しが幸福だと考えるものです。それぞれ、長期スパン、短期スパンの happy に対応しているように見えます。

アリストテレスは、幸福は誰もが求める最高の目標であると言っています。

又、ある哲学者は、幸せは目指すものではなく、日常の中にあることを発見すべきものだ。幸せではなく夢や目標を目指すべきで、それが達成されたところではなく、それを目指しているところに幸せがあると言っています。それは、ヘミングウエイが言った「幸せとは釣りと同じで目的と言うよりは、プロセスなのでは」と同じような幸せの考え方なのですか。哲学者アランは「幸せを追求する過程（プロセス）での努力、修行が大事で幸せになるための努力は決して無駄にならない」と言って、哲学の思索に励むことこそ幸せに繋がると言って彼自身は幸せな人生を全うしたと思われます。

それでは、私のような愚人、凡人が幸福感を長いスパンで得るにはどうすれば良いか？それには、小さな努力と日々の修行？意識改革が必要と思われます。

それは、共に暮らす人、身近な人、友人、他人とのほんのささやかな満足をもたらしてくれる言葉、折に触れてのほほ笑み合う事の出来る時間（阪神が勝った試合など）お互いに楽しく感動出来る時間（映画、芝居、音楽、スポーツ観戦など）あくまでも、ほんの小さなことの寄せ集めから発見することこそ、人が幸福、幸せと感じるものの本質だと思います。

それ以上の大きなものを望もうとする

から苦しくなり、不幸になるのですね。幸福、しあわせは人と比較したりするものではなく、あくまでも自己が感じ、発見するもので、それは、ほどほどな程度に努力して、その過程で得られるものと愚考するのであります。

オクラの山たより（８６）

困了生

一

先回「オクラの山たより　八十五」の終わりで一茶と西田幾多郎との関わりに少し触れました。西田が一茶に興味を持っていた理由は判然としませんが、妻と子を失った悲しい体験を互いに持っていたことがその理由なのではと推察できるぐらいです。

もう一人、よく知られた人で一茶に関心を持っていた人がいます。近代日本を代表する作家である夏目漱石です。正岡子規の友人であった漱石は子規を中心とした「日本派」の代表的な俳人でした。日本文学の研究者小西甚一は「（日本派の俳人の中でも）夏目漱石が、いちばん光る。それほど写生を振り廻さないところに、風格の高さと抒情の美しさがあって、その点では、子規よりもずっと蕪村的である」（講談社学術文庫　「発生から現代まで　俳句の世界」による）とまでいっています。その小西甚一が蕪村的という漱石の句として次の句を紹介しています。

・乱山の尽きて原なり春の風
・菜の花の中に小川のうねりかな
・冷ややかな鐘をつきけり円覚寺
・底見ゆる一枚岩や秋の水

これらの句は確かに小西が「弛（ゆる）み」が出ていると指摘する子規の「糸瓜ぶらり冬瓜だらり秋の風」「秋風や糸瓜の花を吹き落とす」「ツクツクボーシ　ツクツクボーシ　バカリナリ」といった句に比べればずっと風格が感じられます。その小西が漱石の句の絶品だと讃えるのは次の句です。

① 菫（すみれ）ほどな小さき人に
　　生まれたし
② 腸（はらわた）に春滴（したた）るや
　　粥の味
③ 朝寒（あささむ）や生きたる骨を
　　動かさず
④ 別るるや夢一筋の天の川
⑤ 秋の江にうちこむ杭の響きかな

①の句はかわいらしくて、美しい句です。しかも上品な抒情があります。江戸期の文人画の世界があるという人もいます。与謝蕪村が小さなスミレの花を絵に描けば、こんな雰囲気が漂っているのではないでしょうか。また、明治という近代社会の中で苦しむくらいなら、ひっそりと道端で咲くスミレのような「小さな花」に生まれ変わりたいという思いも見えます。日本の開化を批判的に見ていた漱石ならば、ありうる解釈です。

②から⑤の句は生死をさまよった修善寺の大患後の作です。②の句は大喀血した後やっと許された一杯の粥の味。この句の前に記された「こんな旨いものが世にあるか」というのは漱石の感想。③は長い昏睡状態から目ざめた朝の最初の記憶は全身に満ちる骨の痛みでした。この句でおもしろいのは「生きたる骨」。まだ死骸の骨ではないのか、と漱石が表現していることが、自分を客観視する目が感じられ、冷ややかな自嘲も感じられます。

④の句は修善寺まで見舞いに来た人と別れた記憶からできた句です。「夢一筋」がいいです。⑤の句は生死の境から生還して十日ほどたったころの作。澄み渡る秋の空、広き大河、遠くよりする杭の響き。病床にふせることで実生活から逃れた心が本来の自由を得て浮かんだ「天来の彩紋」だと漱石がいっています。

二

さて、ここまで述べてきた夏目漱石と小林一茶との関わりは何かという話になっていくのですが、その前に一つ漱石にまつわるエピソードを紹介しなくてはいけません。

一九〇七（明治四十）年のこと。時の首相西園寺公望が小説の話を聞きたいと当時の有名な文士を二十人に招待状を出しました。出席を断ったのは坪内逍遙、二葉亭四迷、そして漱石でした。出席を断ったハガキの末尾に次の句を漱石はしたためました。

・　ほととぎす厠（かわや）半ばに
　　出かねたり

当時の首相西園寺公望に対してトイレで用を足しているところだから招待には応じられません、とっているこの句はすぐに新聞で報じられて世間ではちょっとした騒動になりました。息子の夏目伸六によれば、小説の仕事が忙しかったこともあるが、和食での宴会が往々にして席が乱れるのを嫌ったためではないかというのが出席拒否の理由らしいのです。「誰の招きであろうとイヤなものはイヤなのだ」といいきる点は「へそ曲がり漱石」の面目躍如ですが、「トイレの途中で行けません」という尾籠な言い訳をして、相手の顔をつぶしながらも同時に自身を笑いものにする自虐的なユーモアで角が立たないようにしているのはさすがです。

この騒ぎよりもさらに大騒ぎになった

のが一九〇七（明治四十）年に起きた「文学博士号辞退事件」です。「末は博士か大臣か」ともてはやされた明治の時代です。博士は国家から授けられる最高の栄誉でした。人々の常識では博士号を辞退することなどはまったく考えられないことでした。文部省、つまりは政府に楯突く行為といえました。

漱石にしてみればそもそも博士号にまったく興味がなかった上に、前年の修善寺の大喀血が完全には治りきってはおらず、その上、幼い五女雛子（行年一歳八ヶ月）を突然死で失ったばかりでした。そうした状況の中で、一方的にかつ強引に授与が決定されたことに漱石は心底憤ったらしいのです。文部省の担当局長に送った手紙で漱石は次のように語っています。

小生は今日までただの夏目なにがしとして世を渡って参りましたし、これから先も矢張りただの夏目なにがしで暮らしたい希望を持っております。従って私は博士の学位を頂きたくないのであります。

「ただの夏目なにがしで暮らしたい希望を持っております」という言葉には漱石の権力者にはおもねらない反骨精神が高らかに表明されていて思わず「カッコイイ」と言ってしまいそうになります。

この漱石が博士号授与を頑として拒否し続けたことを痛快事であると感じ、小林一茶に通ずる精神があると直感した人物がいます。秋元梧楼です。

三

「三愚集」という一九二〇（大正九）年に刊行された画帖仕立ての俳画集があります。一茶の俳句を夏目漱石が書にして日本画家の小川芋銭（おがわうせん）が俳画をつけたものです。「三愚」とは三人の愚か者、つまり、一茶、漱石、芋銭を指します。

「三愚集」には一茶の二十七句を漱石が書にしたそれぞれの句に絵が添えられています。たとえば「痩せ蛙負けるな一茶これにあり」の句にはカッパが相撲の行司役で軍配を返している姿が描かれています。河童は芋銭が得意とする絵の題材でした。

漱石は晩年に良寛の書に親しんでいたそうで「三愚集」の字を見れば、その影響を十分に理解することができます。漱石の書は肩の力が抜けて角張ったところがなく、何のてらいもない自然体の書です。ユーモアも感じられて漱石が楽しみながら筆をふるっている様子が伝わってきます。

「三愚集」は一茶の句柄と飄々とした漱石の書跡、そして芋銭の画風とがよくマッチして味わい深いものなっています。この「三愚集」を企画し刊行したのが秋元梧楼（あきもとごろう）でした。

秋元梧楼は小林一茶が頻繁に通った門人で下総国（千葉県北部）流山の地で味醂商をしていた秋元双樹という人の五代あとの当主で、彼も双樹と同様に文学や芸術に関心が深く、多くの文人と交友関係にあり、高浜虚子門下の俳人でもありました。

こうしたことから秋元梧楼が一茶の句を愛し「三愚集」を企画したことは容易に納得できます。また、小川芋銭は俳誌「ホトトギス」の表紙絵を担当していた人だということで芋銭に絵を依頼した経緯も分かります。では、どうして書は漱石なのか。なぜ、高浜虚子ではいけなかったのか。それは漱石に一茶に共通する反骨精神があると博士号辞退事件を通じて秋元が感じ「余人をもってはかえがたし」と思ったからです。

今まで見たように漱石の反骨ぶりは徹底していますが、一茶も相当なものです。たとえば次の句です。

① 百両の松をけなして納豆汁
② ずぶ濡れの大名を見る炬燵（こたつ）かな
③ 大名を味方に持つや菊の花
④ 梅が香やどなたが来ても欠け茶碗
⑤ かしましや将軍様の雁じゃとて

①の句は金持ちに対する反発と貧しい暮らしながらも心身が温まる納豆汁の対照がおもしろい句です。②の句は冬の雨で「ずぶ濡れ」の大名を温かいコタツに入って見ている庶民。一茶の権力嫌いが見えそうです。③の句は菊の品評会で負けたのか、大名の菊はやっぱりすごい、と負け惜しみが聞こえてきそうです。④は大名が来ようと隣人が来ようと自分は欠けた茶碗しか出さないよ、自分の貧しい境遇を恥じず堂々と詠んでいるのがすがすがしい句です。⑤の句の句意は、うるさいことだ、将軍さまの雁だからといって、です。この句が詠まれたのは江戸向島小梅町。そこには水戸藩の下屋敷があり、水戸徳川家の家臣を雁にたとえていったものです。うるさい武士たちだ、とブツブツいう一茶が見えるようで、これらの句で見る限り世の権威・権力にいくばくかの嫌悪感を持つ一面をもっていたと思えます。

四

さて、「三愚集」の序文は漱石が書きました。漱石らしいユーモアのある文章ですから全文引用してみます。

句は一茶、画は芋銭、書は漱石。それ故に三愚集といふ。句を作りて後世に残せる一茶は気の知れぬ男なり。その句を画にする芋銭は入らざる男なり。頼まれてやむを得ず一茶の句を写せる漱石は三人のうちにて一番の大馬鹿なり。三愚を一堂に会して得意なる秋元梧楼に至って

は賢か愚かほとんど判じがたし。

四五年五月　漱石

「芋銭は入らざる男なり」という言葉は分かりにくい表現です。正直にいえば筆者にもよく分かりません。「一茶は気の知れぬ男」という漱石の一茶評は気になりますが、ふざけ半分の戯作調の文章ですから、漱石がどこまで本気で書いているのか分からず、深く追求するには及ばないでしょう。

それはともかく秋元梧楼が選んだ一茶の句は以下の通りです。

01 あら玉のとし立ち帰る虱かな
02 きりぎりす今日や生まれん菫咲く
03 春雨の大あくびする美人かな
04 痩せ蛙負けるな一茶これにあり
05 なんのその西方よりもさくら花
06 舞扇猿の涙のかかるかな
07 門々の下駄の泥より春立ちぬ
08 深山木の芽出しもあへず喰はれけり
09 笋（「たかんな」とよみ「竹の子」のこと）といふたかんなの闇夜かな
10 ふやふやと餅につかるる草場かな
11 下総の四国巡りや閑古鳥
12 生きてゐるばかりぞ吾と芥子の花
13 撫子の一花さきぬ小夜きぬた
14 如意輪も芽さまし給へほととぎす
15 更衣いで物見せんとばかりに
16 下駄ころりからりきやつらが夕涼み
17 露の世の露の身ながらさりながら
18 蝸牛壁をこはして遊ばせん
19 誰殿の星やら落つる秋の風
20 菊咲くや我に等しき似せ隠者
21 三味線で鳴を立たせる潮来かな
22 明月の御覧通りの屑家かな
23 初雪がふるとや腹の虫が鳴く
24 老木や飲めるまでもと帰り花
25 必ずや湯屋やすみて初しぐれ
26 大根引き大根で道を教へけり
27 年花や四十九年の無駄歩き

一茶がもてはやされるようになったのは大正年間のこと。「歌も詩も自由・自然がいちばん」という時代思潮もあって自由律派の荻原井泉水といった人々が褒め讃えたころからのことです。それ以前の明治の終わりに「三愚集」を企画した秋元梧楼の選んだ句ですから、私たちがよく知っている句が少ないのも当然でしょう。よく知っている句といえば「痩せ蛙負けるな一茶これにあり」「露の世の露の身ながらさりながら」「大根引き大根で道を教へけり」くらいでしょうか。しかも「笋といふ・・・」という句のように筆者には意味の取りにくい句もあります。しかし、いずれの句もなるほどと思える句で明治のころに一茶を愛好した人たちが好んだ一茶の句がどのようなものであったかを知るにはいい資料です。

なお、小川芋銭は「三愚集」の裏表紙に漱石の序文に調子を合わせて次のような文章を書いています。

芭蕉は自然に行き、一茶は人に行く、一茶の句は我の喜ぶところなり。則ちこの画を作りて三愚のうちに入りたる我は愚の上に愚の光栄とや言はん。

「芭蕉は自然に行き、一茶は人に行く」はこの時代の一茶評の一例として見ておくべきでしょう。

なお、最後に蛇足ではありますが、先ほど示した「菫ほどな小さき人に生まれたし」の句の世界を漱石自ら解説した記述が小説「草枕」の中にありますので、紹介しておきます。

木瓜（ぼけ）は面白い花である。枝は頑固で、かつて曲った事はない。そんならまっすぐかというと、けっしてまっすぐでもない。　（中略）そこへ紅だか白だか要領を得ぬ花が安閑（あんかん＝気楽な様子）と咲く。柔らかい葉さえちらちら着ける。評してみると木瓜は花のうちで、愚かにして悟ったものであろう。世間には拙を守るという人がある。この人が来世に生まれ変わるときっと木瓜になる。余も木瓜になりたい。

「拙を守っている木瓜になりたい」という漱石。「拙を守る」とは「目先の利益にすぐに飛びつかず不器用に愚直に生きる」という意味ですが、そのように生きることは今日ますます難しくなっています。住みにくい世となりました。

隠された歴史（６１）

満田　正賢

前回から「隠された歴史（５）」などで何度も取上げてきた九州年号（古代逸年号）の白鳳―朱雀―朱鳥―大化のそれぞれの期にいた倭国（後期九州王朝）の天子とはいったい誰なのかということについて、考察しています。

今回は、最大の謎である大化改元、但し日本書紀に記された六四五年の大化ではなく、「二中歴」に記された六九五年（持統九年）の大化（＊この大化年号は「皇代記」などにも記載されており、この大化を「持統大化」と呼ぶ通説学者もいる）について、考察を深めます。

九州年号の大化がなぜ重要なのかというと、「二中歴」や「皇代記」などでは、大化―大宝と年号が継続しているにも拘わらず、続日本紀には「大化」から「大

宝」に改元したという表現ではなく、単に、文武五年に「元を建て大宝と為す」すなわち「大宝」という元号を建元したと記されているからです。

近畿王朝の系図を記した「皇代記」「皇年代略記」「本朝皇胤紹運録（ほんちょうこういんじょううんろく）」「日本皇帝系図」などの書物にはちゃんと「大化」から「大宝」への改元が記載されています。つまり実際には「大化」年号期にいた天子から「大宝」年号を「建元」した文武天皇に最高権威者が変わった、いわゆる「禅譲」されたという事実がありながら、続日本紀はそれを秘匿した可能性が強いのです。最後の九州年号の「大化」はどのような理由で改元され、その時の天子は誰だったのか。それが今回のテーマです。

持統九年（六九五年）の九州年号「大化」への改元は明らかに瑞祥改元でも災異改元でもありません。むしろその後の七〇一年に建元された「大宝」年号との年号の類似が見られます。私はこの時、倭姫王（やまとひめ＝「わのひめおう」とも読める）に対し敬意をもって遇していた天武と異なり、（＊ここまでの経緯は前月号を参照ください）　倭姫王に対する敬意をもっていなかった持統によって、倭国王たる倭姫王が半強制的に退位させられ、大隅に放逐されたのではないかと考えます。そして倭国王の地位は後述する葛野（かどの）王に譲位されたと考えています。「大化」年号は倭姫王（倭国王・九州王朝の天子）を大隅に放逐し、倭姫王から名目的な倭国・日本国の支配者を文武に禅譲させるための、準備的な改元ではなかったか。そのように想像させる理由は三つあります。

第一は、二中歴が記していない「大長（だいちょう）」という九州年号の存在です。「大化」という年号は「日本大文典」や「永光寺文書」には記載が無く、「大長」という年号が「日本大文典・六九二年改元」「如是院年代記・六九二年改元」「永光寺文書・六九五年改元」「海東諸国紀・六九八年改元」に記載されています。この「大長年号・六九二年改元」という日本大文典や如是院年代記の記述は無視してよいものではないと考えます。

六九二年（持統六年）の日本書紀の記事を見ると、閏五月十五日に「筑紫の大宰率（だざいのそち）河内王らに詔して『沙門を大隅と阿多とに遣わして、仏教を伝えるがいい。また大唐の郭務悰（かくむそう）が、近江の大津の宮で天下を御した天皇のために造った阿弥陀像を、送り上れ』といった」という記事があります。この記事は非常に不可解な記事です。郭務悰という唐の駐留軍の代表が天智天皇に進呈した仏像を、日本最南端の一地方に送るということは通常では考えられません。私はこの記事こそが、倭姫王の放逐（遠島）記事ではなかったかと考えます。

一方、六九五年（大化元年・持統九年）には「五月十三日、隼人大隅に饗した」という記事があります。「隼人大隅」が饗応を受けたのは、隼人大隅の首長が無事倭姫王を大隅に連れて行ったことをねぎらったのではないでしょうか。持統は倭姫王を大隅に閉じ込めたことを見届けて最後の九州年号たる大化への改元を行なったのではないか。そのように考えれば、「大長」は大隅に流された倭姫王が改元した年号であり、「大化」は倭姫王を放逐した持統が倭（日本）国王の地位を九州王朝から近畿王朝へ禅譲させるために立てた最後の倭国王（九州王朝の天子）の即位改元であるという説明が可能になります。

第二は鹿児島地方に様々な内容で残る「大宮姫伝説」です。以下は古田史学の会代表の古賀達也氏がまとめた「大宮姫伝説」の概要です。

「孝徳天皇の白雉元年庚戌の時、開聞岳の麓で鹿が美しい姫を産んだ。その姫は二歳の時入京し、十三歳で天智天皇の妃となったが、訳あって都を追われ開聞岳に帰って来た。その後、天智十年辛未の年、天智天皇が姫を追ってこの地に来られ、天智天皇は慶雲三年に亡くなられた。年齢は七十九歳であったと言う。その天皇の後を追うようにして大宮姫は和銅元年に五十九歳で亡くなられた。」

「大宮姫伝説」は、実際には内容の異なる様々な伝説として伝わっており、その多くはフィクションに包まれています。しかし、共通的に「天智天皇の妃」が鹿児島地方にやってきたという内容が含まれていることから、都を追われた天智の妻、すなわち「倭姫王」が鹿児島にたどり着いたという史実を反映していると考えられます。

第三は「隼人大隅」という場所です。古田史学の会事務局長の正木裕氏は、「大宮姫と倭姫王・薩摩比売」（古田史学論集『古代に真実を求めて』第二十二集）で、続日本紀に記された文武四年（七〇〇年）の「薩摩比売」の抵抗と、養老四年（七二〇年）の大隅・隼人の乱を九州王朝の残存勢力の抵抗と描いています。なお、正木氏は倭姫王が壬申の乱の時に近江朝を逃れ薩摩に帰還したと捉えていますが、九州王朝の天子である倭姫王と薩摩との繋がりを見いだすのは困難です。倭姫王は持統によって薩摩・大隅に放逐されたと考える方が自然ではないかと思われます。

次にいよいよ「大化」（六九五年・持統九年～七〇〇年・文武四年）改元の問題です。最初に述べましたが、二中歴や皇代記などに記されている大化改元は瑞祥改元でも災異改元でもないとすれば即位改元と考えなければなりません。大化改元が即位改元であれは、それは誰によって実施され、誰が即位したのかを明らかにしなければなりません。

私は、新しく即位した天子の有力な候

補としては大友皇子の子である葛野（かどの）王を考えています。葛野王は、壬申の乱以降も皇族としての地位を保っており、懐風藻（かいふうそう＝現存する最古の日本漢詩集）によれば、文武の即位の時にその正統性を説いて文武即位を支持したとされます。壬申の乱で滅ぼされた大友皇子の子である葛野王が殺されないでその地位を保全された理由は、葛野王の生母である十市皇女にあると考えます。十市皇女崩御の際に、天武の長男であり壬申の乱における天武方の総大将であった高市皇子が、異母妹である十市皇女を慕っていたと思わせるような歌を万葉集に残しています。十市皇女の父である天武と十市皇女を慕う高市皇子の意向で葛野王の生存が保証されたことが考えられます。

倭国王（九州王朝の天子）であった倭姫王は九州王朝と関わりの無い持統に譲位することは拒んだが、夫であった天智の孫、天智の後を継いだ大友皇子の子である葛野王への譲位はしぶしぶながら認めたのではないでしょうか。又は、文武による新しい王権に禅譲するための旧王朝の天子として、持統が葛野王に白羽の矢を立てた可能性もあります。

実は、前回触れませんでしたが、倭姫王と婚姻することによって「倭国王」たる資格を得た天智は年号を改元した可能性があります。それについては、前述の正木裕氏が「『近江朝年号』の研究」（『古代に真実を求めて』第二十集）において、近江朝は九州王朝の流れを汲む王朝であり、「中元」「果安」という「近江朝年号」が天智、大友の即位に伴って改元された年号であるという可能性を示唆しています。私は、この正木氏の考察は、前回紹介した西村秀己氏の「倭姫王は古人大兄の娘ではなく、九州王朝の天子だった」とする説と整合しており、正鵠を得ていると考えています。但し壬申の乱で近江朝を倒した天武が、再び倭姫王を倭国王として迎え入れ、年号を白鳳に戻すとともに、「近江朝年号」を無きものとして抹殺したのではないかと考えます。

倭姫王が天智、大友の倭国王としての即位を認めていたとすれば、大友の皇子である葛野王への倭国王の地位の譲位を認めた可能性はより強くなると思われます。しかし、壬申の乱のあと命を救われた葛野王は、何の躊躇もなく、倭国王の地位を文武に禅譲したのではないでしょうか。

前回の考察と今回の考察のまとめとなりますが、白鳳、朱雀、朱鳥、大化が誰によってどのような理由で定められたかについては、「倭姫王が大化改元まで倭国王（九州王朝の天子）だった」という仮説が有力であると考えます。

そして、大化で九州年号が終り、特別な波乱もなく近畿王朝の年号たる大宝年号が建元された時の倭国王（最後の九州王朝の天子）が誰であったかという問題については、「倭姫王と婚姻し倭国王となる資格をもった天智」の孫であり、「天智を継いだ大友」の皇子である葛野王が、形式的な倭国王として持統に担ぎ上げられた末に、新王朝（文武天皇）に禅譲した、という仮説が成り立つのではないかと考えます。

同じ青春を過ごした
セツラーの想い
セツル活動に魅せられて
―とっぽ、40年目の総括―

屋形町北幼稚部パート　トッポ
（69年・佛教大）

「入セツの動機」

69年6月自分探しの果てに飛び込んだのがセツル活動であった。京セツ連の大会で基調報告としてなされていたのが65年テーゼで（学生の要求をもとに・・・）と言うものであったようだし常に（社会変革と自己変革を統一してとらえる）ということであった。「学びつつたたかい、たたかいつつ学ぶ。」ことを学んでいった。

・政治は生活の隅々まで支配してるんや、とか（日本国に生まれて生きているのだから既に日本国に組織されている）とかよくいわれたものだ

「実際の活動、地域で、学校で」

・69年10月か11月に佛大で拡大。「トッポがんばれ」と応援にきてくれるセツラーはありがたく、宣伝ビラの文章がとても素敵だった。その中で加わったのが、ペコ、ほっぺ、トマト、外人、大たちであった。学生セツルメント活動への潜在的な要求が佛大にもあったのだ。執行部の民主的サークルを作るという方針のもとで佛大のセツルは同好会として認められた。70年4月アラとかキーが入り組織として少し大きくなった。そしてその時私は仲間にがっちりと支えられているのだと思った。誠実に一生懸命やれば共感してくれる仲間がいることを知った。それは経験として生涯私を支えることとなった。

・児童福祉を学びたいことから幼稚部に入る。子どもに振り回されながらけんぱ、どろけい、ふえおになど良く遊んだ。「子守ではないか」という大の質問には納得させる答えが出来なかったようだ。一度地域のおじちゃんから食事に招待された。なけなしのお金はたいて鍋をご馳走してく

れた。今から思えば話を聞いて欲しかったのではないかと思われる。

「卒業後、今までとこれから」

71年3月私は卒業。障害児教育に従事教職の道を歩むことになった。組合と全国障害者問題研究会に迷わずにはいった。ここで知ったのは発達を保障する、発達の3つの系（個人、集団、社会）であった。また発達は要求から始まることをたたきこまれた。組合は私にとってもう一つの学校であり情報源でありここでも個性のある様々な仲間を知った。（セツルやってよかった）

２０００年全障研全国大会が神戸で開かれたときのこと。最終日の全体会で重心の子どもを持つお母さんが（全障研の活動に参加することで私は仲間を知りました。学ぶことを知りました。たたかいを知りました。）ときっぱりいった。それを聞いた私は（それって、私がセツルへ入って感じたことと同じや）と思った。私は勤めながらも、常にセツルの延長線のうえにあった。

４年前次男は15歳。不登校まっただ中。白浜で開かれた全国大会に参加。その雰囲気はなんかやさしく、あたたかく懐かしい。どこかで体験したことがある、そうセツルと一緒であった。そして自己肯定感とか子どもの心に寄り添うとはということを学んだ。だけどセツルでは40年も前からそれらを実践的に明らかにしている。みんながセツラーであったころに書いたレポートがそれである。人を切り捨てず、暖かでやさしいまなざしで見つめ、子どもの心に寄り添い、子どもの伸びる芽にはたらきかける。すごいの一言に尽きる。不登校の子どもにも、今一番求められているように思われる。

仲間に支えられながらここまでやってきた私は、今度は支える側に回ろうとしている。不登校児とその家族への支援である。

「若い後輩のセツラーへ」

セツラーは、いちびり、子ども心、遊び心を持った人が多かった。合宿のパフォーマンスがおもしろかった。ちなみに私は鬼のパンツもでっかいでっかいゴリラも手話入りで仕事上キャンプのスタンツでやった。

セツルもまた時代とともに社会の変わりようとともに変わっていくものだろう。だけど「月は東に日は西に沈む」「地球は太陽の周りを回っている」と言うのは永遠に変わらない真実である。セツル活動にとって永遠に変わらない真実とは何か。セツルのアイデンティティとは何か。

65年テーゼであり、85年テーゼであり、3本柱の活動だと思う。それらがでんと中心に居座っていたからこそセツル活動がボランティア一般の中に埋没することなくセツルがセツルとしてやってこられたと思う。

たたかうには相手がいる。戦術がいる、目的がいる。自分はいったいダレのために何のためにどういう戦術を使いたたかうのか。よく知ろうと思ったらしっかりと学んでほしい。右も左も文系も理系も含めて、事実をしっかり自分の目で見、仲間と語り合う。そうしているうちに敵もその正体も戦術も見えてくる。ひとりで素手で戦うのはやめとき。武器を持ったところですぐやられるで。

学ぶことに生きると書いて「学生」と読みます。どうかしっかり学んでください。

「親」とは立って木を見ると書く。佛大の中にたくさんの人たちの協力を得てたった1本植えた木が39年の歳月を得てこんなに大きく育つなんて。「セツルがあったから迷うことなくまっとうに生きられた。」と言うセツラーたちの言葉は、生みの親の冥利に尽きる。自由に話せて相手のこともしっかり話を聞けてまた自分の意見を伝えるそんな場がセツルにある。そのことが何より尊い。

これはトッポの総括。ご参考までに

「道をゆく」四五

成瀬和之

「女芭蕉の心意気
桑原久子の旅日記から」（一三）
京からの『平家物語』源平合戦の旅

① 山鹿兵藤次秀遠を中心に読む『平家物語』

桑原久子さんの住む芦屋町ゆかりの武将、山鹿兵藤次秀遠（やまがひょうどうじひでとお）を中心に『平家物語』源平合戦を振り返ります。桑原久子さんの九州への帰路と重なるからです。

しかし、一一八四年（寿永三年）二月の一ノ谷合戦、一一八五年（文治元年）二月の屋島の合戦と、平家が敗れたことによって多くの兵や武将たちは平家を離れ、最終的に平家に付き一一八三年（寿永二年）七月、平家一門は、都落ちして、九州へ入るものの、九州の有力武士団は受け入れないどころか、後白河法皇の平家追放の命に従い挙兵します。平家一門は大宰府を追われて、九月には山鹿の城に辿り着きました。この時、秀遠は数千騎を従えて平家を出迎えました。九月一三日の夜には月見の宴を開いています。

しかし、ここにも敵の軍が押し寄せると聞きおよぶと、秀遠は平家一門を船で豊後の柳ヶ浦へ逃しました。ここで平家は兵を整えて、讃岐の屋島へ渡り、さら

には山陽路から摂津福原に進出するまでに力を回復しました。秀遠も水軍を率いてこれに加わっています。

従っていたのは、秀遠他わずかになっていました。

そして、一一八五年三月二四日、平家は壇の浦で最後の決戦に挑みます。秀遠はここで華々しい奮闘をみせますが、正午近くに潮が変わり、平家は滅亡しました。

源平合戦の様子を、須磨、屋島、壇ノ浦と順次見ていきます。

② 須磨

須磨は『源氏物語』ゆかりの地であるとともに、『平家物語』ゆかりの地です。そこには『平家物語』の中でもひときわ人気の高い敦盛の塚があります。山陽電鉄須磨浦公園駅を降りて、ファイミリーレストラン、ガストの西側です。敦盛の墓に詣でて桑原久子さんは詠みます。

この君の塚としきけばちるものを
なみだなそへそ須磨のうら波　　久子

また、須磨寺には敦盛の遺品と伝えられる、青葉の笛が宝物館に展示してあります。京の光明寺のところで書いたように、熊谷直実に首をはねられた一六一七歳の美少年、敦盛が腰にさしていた笛が「青葉の笛」です。久子さんは須磨寺に詣でて詠みます。

みだれよとなりていく代を古寺の
かたみにのこる笛の青葉ぞ　　久子

宅子さんも詠みます。

きかねども音(ね)にぞ泣かるる須磨
寺に残る青葉の笛のしらべは　　宅子

③ 屋島

源義経の鵯越の「坂落（さかおとし）」で有名な「一の谷の合戦」の次は「屋島の合戦」です。これはあっけなく終わってしまいます。この合戦では、七，八〇騎の義経軍が、千騎余の平家軍に勝利します（『平家物語』には少し脚色があるようですが）。義経が民家に火をつけると、背後から源氏の大軍が押し寄せてくると思い込んだ平家の一門は屋島を捨てて、安徳天皇ともども海に浮かぶ兵船に逃れます。そして壇の浦へ向かいます。

平家一門の都落ちは、わずか六歳の安徳天皇を伴っての旅でした。従って、源平合戦の各地には安徳天皇の行在所（あんざいしょ）跡が残されています。私は「女芭蕉の旅」で数多くの行在所跡を発見しました。神戸市須磨区の一ノ谷町、屋島の東側、桑原久子さんが住んでいた芦屋町の大君神社でも安徳天皇行在所跡の碑を見つけました。

大君神社は、なかなかカーナビでも見つからなくて、近くの県道でご近所の母娘（高校生）に聞いたら、御存じなくて、ケータイで調べて教えてくださいました。笑い話ですね。

④ 壇ノ浦

壇ノ浦の合戦で平家は滅亡します。もはやこれまで。状況を悟った二位殿（清盛の妻、安徳天皇の祖母）は、天皇の象徴「三種の神器」を身に着け、安徳天皇を抱きかかえ、船端に進みます。六歳の天皇は、「自分をどこに連れていくのか」と二位殿に尋ねます。残念ながら御運が尽きた、ここは悲しいところだから極楽浄土へお連れしますと言って、天皇を促します。言われるままに「ちいさくうつくしき御手をあわせ」る天皇。二位殿はすぐさま「波の下にも都がございますよ」と慰めながら、深い深い海の底へ。

こうして安徳天皇は海に沈んで、幼い命が消えました。

巻一一「先帝投身」は、幼い天皇が平家とともに運命の終わりを迎える、『平家物語』の中でもひときわ哀れを誘う段でしょう。

「三種の神器」も海に沈みますが、水深が四〇メートルから五〇メートルに達し、海流が速く、海士も潜ることができません。また海の底がサンドウェーブ（海の底の砂が柔らかい波状の地形）のため剣も埋まってしまいます。勾玉と鏡は回収されましたが、ついに神剣は発見されずじまいになりました。「承久の乱」を起こした後鳥羽上皇は、壇ノ浦の合戦のあった一一八五年当時六歳で、「三種の神器」なしで天皇に即位したのです。この神剣が心残りで、生涯刀造りに情熱を燃やし、自ら刀鍛冶までしたほどでした。武士の台頭する時代にあって、後鳥羽上皇は最高権力者の地位を取り戻したかったのです。一二二一年、後鳥羽上皇は、「北条義時を討て」という命令を出し、鎌倉幕府を倒そうと挙兵しますが、惨敗し、隠岐に流されます。既に名誉や官職を与えれば武士を従わせることができるという時代ではなく、西日本の六カ国の土地を与えるという武士のリーダー北条義時に多数の御家人たちは従ったのです。一二二一年まで鎌倉幕府の支配権は関東など東国にしか及んでいませんでしたが、「承久の乱」で幕府の支配権は西日本にまで及ぶようになりました。

余談になりますが、鎌倉幕府の成立はいつか？学校では一一九二年（源頼朝が征夷大将軍になった日、「いい国つくろう鎌倉幕府」）と習ってきましたが、実は歴史学界では定説がないのです。守護・地頭の設置が後白河院に認められた一一八五年説が有力ですが、西日本を含め全国支配が確立した一二二一年説まであるので

す。だからこそ歴史を学ぶということは興味深く、奥深いと言えます。

普通『平家物語』は戦記文学の最高の作品として評価されています。しかしそれはこの物語の一側面にすぎません。『平家物語』は平氏一族の没落を物語った叙事詩であって、戦闘の物語はそのなかにはさまれた一つの場面にすぎません。

当時の人々にとっては平家の栄華は一時は不動のように見えました。その平氏が内戦によって、一挙にくずれ去り、一族が海中に滅びたということは、いままでの日本人が経験したことのない劇的な歴史の変動でした。この激しい歴史と人間の運命の変転を物語るというのが、『平家物語』の精神であって、けっして一篇の戦記文学ではないのです。

安徳天皇と仁位殿の入水を見て、平家の武将たちも次々に海に身を投げます。物語の最後になってその存在がにわかに浮上してくるのが平知盛（たいらのとももり）清盛と仁位殿の子）です。

敗戦を見届けて「もはやこれまで」という時の知盛のセリフが、「見るべき程の事は見つ」

（もはや見るべきことはすべて見終わった）です。そして、彼は鎧を二着着て、乳母子と手を取り合って、海に身を沈めました。能や歌舞伎では碇をかついで入水したとされています。関門橋の下の壇ノ浦古戦場跡には、「八艘飛び」を見せる源義経に対峙する、碇をかついだ知盛像が建てられています。

歴史学者の石母田正は、『平家物語』における知盛について、次のように説きます。

人間の生への執着と利己心の恐ろしさを深く知るゆえに、そうした人間理解にたって、運命というものをとらえることができた人間として、さらに、自分と一族、あるいは時代そのものを動かしているところの運命の存在を確信しながら、運命を回避したり、そこから逃れようとしなかった人間として描かれている。

さらに、石母田正『平家物語』は、次のように述べます。

『平家物語』の作者は、後からかんえれば、滅亡するほかなかったような運命にさからって、たたかい、逃げ、もがいたところの多くの人間に興味を持ったのである。それを物語にしたことによって、彼は人間の営みを無意味なものと考える思想とたたかっているといってもよい。

『平家物語』の作者については、はっきりしたことはわかりませんが、おそらく信濃前司行長（しなのぜんじゆきなが）という人だろうと言われています。ただ、特定の個人ではなく、何人もの人が『平家物語』を作り上げていったと考えられます。

石母田は『平家物語』には、抗いがたい運命を前にしたとき、人はどう生きるかという問題があることを明らかにし、平家一門のそれぞれの振る舞いを丁寧に辿ることで『平家物語』を現代人にとって身近な、そして人間が生きていくための、よすがとしてよみがえらせたのです。

もちろん、この知盛像は、石母田が「作者がその文学的な構想力の思想や形象化の力によって創りだした新しい人間像」であると述べているように、歴史上の人物としての知盛とは、多くの点で異なっているでしょう。凛とした立ち姿と深い人間味のある知盛像には石母田正の人間観・政治的信条が反映されており、石母田の分身でもあるのでしょう。

⑤ 古典の生命力

石母田正『平家物語』の「あとがき」で、石母田は「「もし、『平家物語』が古典の名に値するものならば、どのような時代の変化にもたえ得るだけの力を、それ自身の中にもっていなければならない。」と述べ、さらに次のように書いています。

江戸時代から明治時代の学者は、『平家物語』の叙述が歴史の事実とちがうということを色々証明しようと努力したことがある。これは歴史の研究には意味のあることではあったが、創作された物語である平家にとっては、大した意味のないことであり、責任もないことである。（中略）『平家物語』を独立の物語＝文学として正しく理解する努力を自分でやってみてはじめて、歴史の研究者は平家の持つ力から解放され、「平家物語」を全体として歴史研究の中に生かすことができよう。

また、石母田正は同じ一九五七年に書いた『物語による日本の歴史』の最後を次のように結んでいます。

『平家物語』の作者の立場は、平家の味方でもなければ源氏の味方でもない。貴族の味方かといえば、新興の武士を尊敬と同情をもって描いている。それでは武士の味方かといえば、没落する貴族のあわれさを満腔（まんこう）の哀惜（あいせき）をこめてうたっている。平家の作者は、そのような敵味方を超えた場所で、ただ激動する時代の変転を一篇の叙事詩としてうたいあげようとしたのである。この点で、『平家物語』は、特定の勢力の文学ではなく、時代そのものの所産であった。

つまり、『平家物語』は今に生きる古典

なのです。一九七八年、石母田の友人で劇作家の木下順二は、この石母田の知盛像に衝撃を受け、運命に抗し闘う知盛を主人公とする長編劇『子午線の祀り』（第一次上演は一九七九年四，五月。岩波文庫の『子午線の祀り・沖縄　他一編』に収録）を発表しています。彼は、石母田『平家物語』の「見るべき程の事は見つ。今は自害せん」以下の文章を、群読の中に、「ほとんどそのまま（中略）借りた」。知盛の言葉に「千金の重みを感じるから」とその傾倒ぶりを語ります。

二〇二二年度から実施される国語の新しい学習指導要領は、実用的な文章を重視する方向性を打ち出しました。二〇一九年九月一五日付の「毎日新聞」の社説は「変わる高校の国語　文学が軽んじられる恐れ」で次のように書いています。

文学は人間の存在と密接にかかわる。多感な時期に、教科書で出会った文学作品が呼び水となり、人生の新しい扉を開くきっかけになることもある。教科書から文学作品が少なくなることで、その機会が減ることになりはしまいか。

（中略）会話や文章の行間を読み取り、他者の立場を想像することが、人間社会を豊かにし、コミュニケーションを円滑にする。それこそ、文学によって養われる力ではないだろうか。

国語教育は、文化の根幹そのものだ。教育現場だけでなく、社会全体で考えていくことが必要だ。

私も、この「毎日新聞」の社説に同感です。石母田正の言うように、「古典」は、時代の変化にも耐えうる力を持っているのですから。

俳句

影山　武司

地球儀の並ぶ窓辺に小鳥来る
縄電車連ねてしゆぽつぽ百千鳥
カリヨンの鐘の銀色秋澄めり
遠来の友を見送り十三夜
鬼灯を愛でて江戸つ子訛かな
三色のテントの建ちて秋高し
松明の火の鬩ぎ合ふ虫の闇
虫の闇焦がし焔の崩れ落つ
会話なきひと日と気づく夜寒かな
朝寒やパソコンの蓋開くとき

◇　十四ページの文章からの続きです。

ぼた餅も作れぬようになった母　みつこ

私が帰省すると、母はいつも田舎料理を作り、季節に応じて、ぼた餅や柏餅などを作ってくれた。それが、父が逝って十数年を過ぎた頃だろうか、「今から帰るわ」と駅に着いて電話すると、「何か弁当でも買っておいで」と言われ驚いたことがあった。五十代の息子と八十半ばの母の会話。えっ、なんか作ってよと思ったが、それからはそんなことが少しずつ増え、ぼた餅も柏餅もなくなった。

母がもし川柳をたしなんでいたら、母もまた自分のことを「ぼた餅も作れぬようになった母」と詠んだかもしれない。そう思うと涙が出た。

編集後記

ＳＫ生

▲ときどきであるが小生も児戯に似た絵を描くことがある。それも墨で描いた絵である。何年か前、さあ始めようと思い、まず小学校低学年向けの「お習字セット」を近所のスーパーで購入した。そんな「お習字セット」では上達の見込はないよ、と友人からは忠告を受けたが、今もその「お習字セット」の筆を愛用している。月に何度か毛の抜け始めた筆を手にして花やら果物やらを描いているのだが、確かに友人の言ったようにまったく絵がうまくなったという気配はない。しかし、拙なる絵を細々ながら描き続けてはいる。▲英国の哲学者コリングウッドは「人が何かのものを描くのはそのものを見るためだ」と言っているそうだ。新たな発見をするためといってもいい。怠惰な小生でも草花を描くときには花びら・葉の形や付き方、枝がどのように伸びていくかをしっかりと見る。そのたびに新しい発見をすることが多い。以前は「花」「野に咲く花」という以上には見えなかった草花がそれぞれ自己の存在をしっかりと主張するように見えてくるから不思議だ。この瞬間、幼児にかえったような感動を覚える。▲このことはきっと言語表現でも同じはず。「山路来て何やらゆかしすみれ草」と詠んだとき芭蕉はどのような感動を覚えたのか。一度、聞いてみたい。

連載 ふみの道草（65）　山椒魚

宮崎県延岡市に「三性川柳派」を標榜する川柳結社「南樹川柳社」がある。

川柳は笑いと思っている方には何の事かと感じられるかもしれないが、「笑いは死んだ」と三性川柳を提唱し一九五二年創立、実践する結社である。三性とは、諷刺性・ドラマ性・深層性のことで、広汎な視野でイメージによるドラマ化を求め、人とは何かを問い、われかく思えりの探究の結果を五七五に表現することをめざすという。意識してそういう句を作るのは並大抵ではないだろうが、私は、人の句を読むときそこに込められている意味を、三性の精神に沿って出来るだけ「大げさ」に明らかにしたいという気持ちを隠すことが出来ない。なぜなら、一つには、それが私自身の自己確認の作業になるからである。もう一つの意味は、私の評がもし作者の目に留まることがあれば、一度詠まれた句は独り歩きするのであり、こんな読まれ方もあるのかと知って自分の思いを改めて見つめ直す機会や、必要なら表現を考え直す機会になるだろうと思うからである。

日々熱波列島赤く染め上げる　惠子
世界規模自然破壊が治まらず　晶
猛暑日に地球の彩が変わりそう　英明
燃える夏地球が泣いて危機せまる　孝子
宙焦がし海山汚す人の知恵　ミヤ子

尋常でない猛暑が続いた八月に、気候危機への警句が詠まれました。句会では、「傷ついて泣く泣く自転する地球　ひろやす」という句にも出会いました。まことに、「人が住む星でなくなるかも知れぬ」と心配になります。

卵にも時価と書きたくなる値段　秋子

日本の食料自給率は三十八％、エネルギー自給率はわずか十％。遠く離れたウクライナで戦争が始まると、そんな国に、あっという間に異常な物価高騰が押し寄せて来ました。「安売りの目玉になれぬ卵たち」を見る生活者の目には鋭いものがあります。

ふる里を母が包んだ新聞紙　南北

しみじみとした思いがあふれてきます。内藤凡柳川柳集『人間』にある凡柳句と同じ思いです。

ふるさとはよし風呂敷に紐を足し　凡柳
悔しくて泣きたい時は空仰げ　信一
大波をくぐって見えた青い空　幸子
五七五種の尽きない青い空　修一

山や海や水は、そして空は、なぜこんなにも人の心を引き付けるのか。これまでに聞いた歌をたどれば、「空」を歌った歌の一節が蘇りました。

♪　ああ人は昔々鳥だったのかもしれないね　こんなにもこんなにも空が恋しい（中島みゆき『この空を飛べたら』）

♪　本など広げて言葉を探すより人は空を見上げている方が　ずっと賢くなれるんだと　遙かなる人の声が僕に届く（海援隊『遙かなる人』）

ふと思う明日は確かに来るのかと

喜代志

長い間、誠実に歩んできた暮らしのなかで、何かの折にふと湧きあがってきた思いをそのままつぶやいた句です。物理的な意味では明日は必ず来ると分かっていても、いつかは誰にでもあるだろうそんな思いを詠んだ句に、心がゆれます。

昔のことです。ブルーハーツという若いバンドが九十年代に歌っていた歌です。若い人には若い人の鋭い直感があると思ったものです

♪　永遠なのか本当か　時の流れは続くのか　いつまで経っても変わらない　そんな物あるだろうか　見てきた物や聞いた事　今まで覚えた全部　でたらめだったら面白い　そんな気持ち分かるでしょう　答えはきっと奥の方　心のずっと奥の方　涙はそこからやって来る　心のずっと奥の方　…　情熱の真っ赤な薔薇を　胸に咲かせよう　花瓶に水をあげましょう　心のずっと奥の方（ブルーハーツ『情熱の薔薇』）

自家菜園土砂に負けずに続けたい　節子
退院日心がはやる田へ畑へ　みちる
退院の荷はそのままに茄子へ水　春子

「土に生きる」という言葉があります。人と土の切っても切れぬつながりに、あらためて思いを馳せました。そして思いました。人間は、「大地水空気があれば生きられる」ことを。

◇　右の文章の続きは十三ページにあります。

季節の花々 in 京都府立植物園

秋バラ

菊花展

伊勢菊

ミントバーム

白花ホトトギス